

令和5年度入学試験問題

教育支援専門職養成課程・心理コース(総合問題)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
3. 解答用紙は3枚、草稿用紙は3枚です。
4. 各解答用紙には受験番号を記入する欄がそれぞれ1箇所あります。
5. 試験終了後、問題冊子及び草稿用紙は持ち帰りなさい。

問題 以下は、正村公宏著「ダウン症の子をもって」の抜粋です。文章を読んで以下の問に答えなさい。

一九七〇年の八月に、私たちはもう少し大胆な旅行を企画した。北海道を一週間歩いてみようというのである。すでに高校生になっていた彼の兄は、留守番をすることになった。このとき以後、私たちは、三人で出かけるのが普通になった。

まず、<sup>くしろ</sup>釧路行きのプロペラ機のなかの三時間が彼には耐えがたかった。どうにも落ち着いていないのである。鉄道やバスと違って外が見えないので、いっそう大変だった。なだめたり、すかしたりして、ようやくの思いで着陸したのは、濃霧で行けなかった釧路の代わりの帯広であった。そこから私たちの道東旅行が始まった。

このときの写真を見ると、どこで写したのも、私か家内のどちらかが彼の手をしっかりと握っている。または、彼を背負った姿で撮られている。そうしていないと彼はどこへでも飛んでいってしまったからである。

三日目の宿泊地は、<sup>あぼしり</sup>網走湖畔であった。そこに近代的な建物のホテルがあった。その建物の、多分、五階か六階の部屋に案内された。私たちがちょっと目を離したすきに彼がいなくなった。廊下へ飛び出してみたが、そこにはいなかった。廊下の端に屋根に出るドアがあり、そこから、一人の従業員に手を引かれて彼が現れた。彼はそのドアを一人で開け、すでに屋根の上へ出ていたところを、その人に発見されたのであった。もし屋根から転落していたら、生存の可能性はなかったと思われる。このとき、彼は七歳半であった。

この旅行の最後に近くなって、当時、<sup>あしべつ</sup>芦別に住んでいた親類を訪ねた。彼の伯父にあたる人とその家族に会うためである。

その家の庭に、大きな秋田犬が<sup>つな</sup>繋いであった。大の犬好きで、恐れというものを知らない彼は、その秋田犬が食事をしているところへ構わず寄って行ってしまった。大人が止めようとしたときにはすでに間にあわず、<sup>か</sup>噛みつかれた。薄い夏の<sup>はん</sup>半そで袖シャツのうえから肩のあたりを噛まれた。しかし、犬のほうで、主人のところへきた来客と見て加減をしたのであろうか。歯のあとは残ったが、大きくは切れなかった。

それから、数年のあいだその人たちと会うことがなかった。ある日、彼らのほうで東京へ出てくる機会があって、夫婦で私の家へ立ち寄った。隆明にとっては、数年を隔ててこれが二度目に、しかもまったく違う場所で対面するという伯父たちであった。玄関へ彼らが着き、来客好きの彼が飛びだしてその顔を見たとき真先に彼がしたのは、あのとき犬に噛まれたほうの肩を出して見せるという動作であった。<sup>①</sup>これには一同がびっくりした。それまでに、私たちは、このときの来客については彼には何も話してはいなかったのである。私たちは、彼の( )の意外な確かさをまた教えられたのであった。

その後も一泊か二泊の旅行にはよく連れだしたし、南紀州とか、九州とか、北海道一周とか、もっと長期の旅にも連れて出た。私たち夫婦が旅に出るといえば、たいてい、彼がいっしょである。

以前のようには手がかからなくなったといっても、いつまでも幼児のようなところのある彼を連れて歩くのは、私たちだけで旅行するのとは違い、やはり骨が折れる面がある。しかしその反面、彼を身近に置いているという安心感もある。そのうえ、彼が喜んでどこへ行くのにもついて歩いてくれることは、私たちの旅に出る楽しさと「張り合い」を大きくしてくれる一つの要素であると思う。

彼がいなければ、もっと気楽ではあるだろうが、何とはなしに、淋しく、また空<sup>さび</sup>しい<sup>むな</sup>こともあるのではないだろうか、と家内が旅先でふと語ったことがある。<sup>②</sup>

仕事で家を離れることの多い私と違い、ごくまれにしか機会の与えられないもっと自由な旅を、つねに心から楽しみにしている様子のある家内の口から、そういう言葉が出たのであった。私たち、とくに家内にとっての彼の存在の重さが、そこに、はからずも示されていた。

激しく多動的な彼をかかえていた当時、普通のホテルや旅館を連れて歩くのはとても大変だが、何とか彼を連れて夏ぐらいは東京を離れて暮らす方法を講じられないかとしきりに考えた。そこで信州・穂高町の常念岳の麓の森のなかに僅かの土地<sup>わず</sup>を買い、小さな家を建てた。一九七一年である。業者の側の段取りが不備で、その夏は水道や電気がはいらず、不便きわまりない状態であったが、私たちは待ちきれないで一夏をそこで過ごした。

この夏以後は、毎年、少なくとも一回は、穂高町へ出かけていくことになった。

この穂高町で夏を過ごしているあいだに、彼に海水浴をさせてみようかと思いたった。白馬山麓<sup>さんろく</sup>を經由して姫川沿いに北上し、糸魚川<sup>いとがわ</sup>に出るのは比較的容易であった。

それを思い立った最初の年には、新潟県と富山県の境の「親知らず子知らず」海岸へ出た。その後は、糸魚川から右に折れて、筒石海岸に行くようになった。千葉や神奈川の海と違い、人がごった返していなかったし、水もきれいであった。何年か、越後筒石海岸<sup>えちご</sup>での海水浴が彼の年中行事になっていた。

初めは、砂浜に打ち寄せる波と遊ぶという程度であった。そのうちに、浮き輪を着けて海の中へはいるようになった。つぎには、浮き輪なしに、泳ぐようなかたちをした。

しかし、施設のほうで連れていってくれるプールでほんの少し泳ぐことができるようになると、かえって海へ行くのを好まなくなった。「海へ行こうか」といっても、いやだといって山小屋を出ようとしなくなった。

私たちは、彼が泳ぐようになるとは思っていなかった。しかし、水を恐れず、むしろ水泳に挑戦する様子が見えていた。時間がかかったが、ともかく水に浮くようになり、ほんの少しではあるが、前へ進むようになり、そして、息つぎさえするようになっていった。これも、私たちには、驚きであった。言葉で要領を教えてもらうことのできない彼が、どうしてここまで到達することができたのか、不思議な気さえするのである。

しかし、そのように、プールで水泳をする習慣がついてくると、彼は、海での水泳は敬遠するようになってしまったようである。海は、波があり、不安定で、うっかり水を飲むと塩辛いからではないかと、私たちは、彼の態度にいちおうの解釈をつけている。<sup>③</sup>

夏のプールは、いまの彼にとって、最大の楽しみの一つである。

注：ダウン症：ダウン症候群。21番染色体での異常を原因とする障害の名称。知的障害、身体特徴を呈する。21番染色体が3本となるトリソミー型、トリソミー細胞と正常細胞が混在するモザイク型、同染色体上での情報の位置が入れ替わる転座型がある。

正村公宏(2001) 「ダウン症の子をもって」新潮文庫 p 116-121(一部改変)

問 1 文中の( )に最も当てはまると考えられる言葉を入れなさい。

問 2 下線①について、なぜ、一同が彼の行動に「びっくり」したのか、その理由とその背景について 200 字以内で述べなさい。

問 3 下線②における「家内にとっての彼の存在の重さ」について、著者の「家内」が口にしたことばを受けて、どのような解釈が考えられるか、300 字以内で述べなさい。

問 4 下線③について、著者はなぜ「いちおうの解釈」と表現しているのか、文章全体からその根拠および理由をあげて 300 字以内で発展的に述べなさい。